

白百合の斜士Ⅲ

被虐の姫君ブリジット



二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 筑摩十幸

挿絵 助三郎

第一章

逃亡

007

第二章

少年と少女劍士

057

第三章

淫夢の狭間で

097

第四章

淫獄に墮つ

185

登場人物紹介

Characters



ブリジット・ローゼンバーグ／白百合の剣士

仮面の剣士として奴隷商と戦うも、罠に囚われ牝奴隷に調教された、ランドール王国の第一王女。

メイ

白百合の剣士の活躍を陰で支える、ブリジットお付きの侍女。

レイラ

ブリジットとは腹違いの姉にあたる第二王女。バスクと組んで白百合の剣士を陥れた妖艶な美女。

スティア

反連邦組織『青い獅子』のリーダー。義手をつけた女剣士。

サガ

『青い獅子』に所属するあどけない少年。

バスク

レイラと組んでブリジットを奴隷に堕とした、一流の奴隷調教師。

「すごいの……奥にあたって……はあう……感じちゃう……サガ……ご主人様あ」

とどめるモノがないまま、肉体が絶頂目指して駆け上がっていく。打ち込まれる衝撃にあわせて、切迫した息づかいが「ひっ、ひっ」と喉を鳴らした。

「ここまで深くかかれば、とりあえずは十分かな」

激しく腰を突き上げていたサガが、フッと笑みを浮かべて動きを止める。そしてブリジットの額に小さく印を結ぶ。

「……あ」

何度か長い睫毛をしばたかせて、ブリジットの碧眼が光を取り戻していく。

「正気に戻ったかな。お姉ちゃん」

「サガ……」

自分を見下ろして嗤っている少年を見ても、思考はまだ回復しない。

「どうして……ここは……うっ」

身を起こそうとして、胎内に感じる異物感に顔を歪めた。次の瞬間瞳が大きく見開かれる。

「な、なにをしてるの!? サガ! これは……一体!？」

親しかった少年に犯されているという、信じられない事態を前に表情が凍りついた。だ

が跳ね起きようとしても身体は一向に動かない。

「まだ動けないよ。身体のほうは解放していないからね」

嗤いながら腰のスライドを再開させる。

「んああっ！」

その鋭く快美な衝撃で、いつの間にか自身がギリギリまで高められていたことに気づく。その異様な感覚は、かつての魔の一ヶ月、恐るべき奴隷娼婦としての日々を思い出させた。

「これは……まさか、暗示……あっ……あなた……何者なの……？」

声を引きつらせながらも相手と話すことで、なんとか理性にしがみつく。

「くく。ボクは連邦の人間だよ」

緑の瞳が冷酷な光を宿しつつ細められた。衝撃的な事実には声も出ない。

(な、なんてことなの)

弟のように接してきた少年が連邦の密偵だったとは。しかも呪術に通じているところから高位の術者だと思われた。だとすると年齢も見た目とは違うのかもしれない。

「だ、誰か……っ！」

「大声出しても無駄だよ。呪符で封じてあるから音も光も外には漏れないんだ」

少年は余裕の笑みを浮かべている。

「ここに来た目的は二つあった。ひとつはレジスタンスの動向を探ること。もうひとつは

魔装獣の機能実験。お姉ちゃんに壊されちゃったけどね」

話しながら捻るような動きで膾肉を抉り、牝の淫汗を搾り取る。

「でも、それはもうどうでもいいんだ。こないだの玩具おもちゃを手に入れたんだからね」

「うああっ！ やめなさい……卑怯者！ くうっ！」

身体の自由を奪われたまま、少年にいいように弄ばれて屈辱が胸を灼く。だが犯され続ける蜜壺からは気が遠くなるような快樂電流が全身に広がっていき、ブリジットは確実に頂上に向かって追い込まれていく。

「初めて会ったときに気づいたよ。お姉ちゃんの中に深い暗示の呪縛が残っていることに。最初は遊びのつもりだったんだけど気が変わったよ。いまはどうしてもお姉ちゃんが欲しくなっちゃった」

「そんな……ううっ……思い通りに……なるもんですか……」

「ふふふ。いままで毎晩、ボクとセックスしていたクセに。いまさら強がっても無駄だよ」少年の言葉に頭をハンマーで殴られたような気がした。あの毎晩のように見た淫夢が現実だったとは……。そのときの自分の破廉恥な姿が脳裏をかすめると、一気に理性が突き崩されそうになる。その隙を逃さず、少年の肉棒は勢いを増して最奥の子宮口をドスドスと突きまわった。

(くうっ……はああ……そ、そこダメえ……)

最大の弱点を責められて、意識が霞んだ。目の前が淫靡な炎で真っ赤に燃えている。

「食事にも毎回媚薬を混ぜていたんだよ。気づかなかった？」

悪戯をした子供のような笑顔で、恐ろしいことを口にする。

「だから、ほら。おっぱいが敏感になっっているでしょ」

ブラジャーを押し上げて、豊満な乳房をキュッキュッと揉み始めた。小さな掌を精一杯広げ、白い乳肉に指を埋め込むようにして麓ふもとから頂たかねに向かってマッサージする。

「ああ……うああ……っ」

双乳からいままで感じたこともない快感が湧き起こって、ブリジットは狼狽えた。一揉みされるたびに、熱い疼きが実体感を伴って胸の奥に生まれる。

(ああ……な、なに……コレ……)

ねちっこく揉まれて、白かった乳房がほんのりピンク色に染まり、キラキラと汗に輝き始める。乳首がジンジン疼きながら乳輪ごとプツクリ膨らんだ。その指の先ほどに勃起した緋色の果実を少年の唇が捉えた。

「ひいっ！ ああ——ッ！」

グンッと身体が反り返る。電流というのが相応しい激感が乳頭から乳肉を貫通して背骨にまで達する。電流はそこから上下に分かれて脳と子宮を同時にビリビリと痺れさせた。自由が利かない身体で、指先だけが震えながらシートに爪を立てる。

「ふふ、お姉ちゃん、気持ちいい？ おっぱい吸われて気持ちいい？」

チユウチユウとワザと音を立てながら乳首を吸いしやぶる。

「ふああッ……そんな……こと……ない……あううッ」

媚薬の効果なのかわからないが、吸われる乳首の快感は明らかに異常だった。乳頭が灼けるように熱くなり、そこを吸われるたびに鋭い快楽の針が突き刺さるようだ。

(も、もう……胸は……ああ……あそこが……熱く……)

サガは乳を吸いながらズブズブと秘肉を刺し貫いてくる。小柄な少年の身体は、結合状態だともちようど胸の間に頭がくる。その体格を活かした二ヶ所責めでブリジットの身体は狂おしいまでに昂ぶらされてしまう。ニップルをきつく吸われ、甘噛みされると子宮がキュンと収縮する。そこを少年の肉棒がこれでもかとはかりに高速で連打する。

幼い子供に乳を吸われながら犯されるという異常な状況が、マゾの毒を溶かし込んだ母性愛を呼び起こし、女としての本能的な部分までが狂わされる。このおぞましい凌辱にすら女の悦びを感じてしまうのだ。

「はあんっ……サガ……もう……やめ……あっ、あっ、あっ……あふんっ」

呼吸が乱れ、声が漏れるのをもう抑えきれない。小刻みな痙攣が少女の限界を告げて、全身を震わせる。攪拌される蜜壺から白く濃い牝蜜が溢れて、少年のペニスにまとわりついていく。

「ふふふ。一生解けないくらい強い暗示をかけて、ボクのお人形にするんだ。そのあと連邦に連れて行ってあげるよ」

「イヤッ！ イヤッ！」

敵国に連れ去られ少年の人形として一生飼われる。考えただけで背筋が凍る思いだ。しかしいくら恐ろしいと思っても、心と裏腹に肉体はマゾの悦楽に燃え上がる。

(な、なんとかしないと……このままじゃ……)

脱出の糸口を探そうと気持ちは焦るのだが、全身がほぼ完全に支配されていた。呪術の強さはレイラ以上かもしれない。快感に耐えようと飢を食いしばることすらままならない。

「ひっ……ああっ！」

突然、聖域に鋭い快感の火花が弾けた。サガの手が鎖を引きずり出し始めたのだ。

「もっと気持ちよくしてあげるね」

「うああ……」

絶頂寸前で敏感になった媚肉の襞を、一枚一枚捲り返すようにして鎖が引かれる。クレヴァスの上端、びよこんと膨らんだクリトリスを擦りながら伸びた鎖が、ヌメヌメと花蜜を二人の身体の間塗り込みながら、ブリジットの目の前にまで持ってこられた。

「これをくわえて」

「あ……あ……」

命令に従って震える唇が開いてしまう。そして綺麗な白い前歯がカチリと、鎖の先端のリングを噛んだ。

「うう……」

「きれいだよ、お姉ちゃん」

サガは嬉しそうに目を細めた。見事なS字曲線を描く白い裸身の中央を、一本の金鎖がキラリと輝きながら伸びている。それはまさに生きた被虐の弦楽器だ。その弦を少年の手がピンと弾くと、途端に電流のような快美感が子宮を叩く。

「くううっ」

たまらず顎が仰け反り、くわえた鎖が引かれてさらなる刺激がブリジットを襲う。絶対的な拘束力は消えていても、快樂責めの淫具としてはまだ十分に機能している。サガは鎖を何度も弾いて、少女剣士から汗を搾り取っていく。

「きひいっ！」

金属的な悲鳴を上げても口はリングを離さなかった。いや、離してくれない。

「その調子でいい音色を聞かせてね」

ニッと嗤ってサガの腰の動きがさらに激しくなった。膣肉を引きずり出すように後退したカリが抜け出る寸前で反転して、勢いに任せて飛沫を飛ばしながら深々と侵攻していく。大人の平均を超える大きさをスライドさせるために、少年の小柄な身体は少女剣士の上で

ダイナミックに躍動する。それにつれて二人の身体に挟まれた鎖が無茶苦茶に擦られ、引かれ、揉みたてられる。その刺激がダイレクトに子宮を震わせた。

「ひっ……きいっ……ひやめ……もう……ひやめてえっ！」

津波のように押し寄せる快感から逃れたいのか、それとも快感を求めてか、ブリジットは首をカクンカクン振っては、鎖を引き絞り虐待の悲鳴を振りまいた。鎖に歯があたりたびに、子宮口を甘噛みされているような快感が走る。

完全に淫らな楽器にされてしまった仮面の少女は、為す術もなく悩ましい被虐のメロデイを奏でていく。

ズブッ！ ジュブッ！ ズブッ！ ズブウツツッ！

交互に吸われる乳房が、突き貫かれる媚肉が灼けるように熱くなった。それら三方からドロドロに溶けたマグマが女の中心である子宮に流れ込んでいく。少年の身体を乗せたまま腰がググッと持ち上がった。

「ほらほら、もつと啼いて。いい声を聞かせてよ」

「くっ……あっ……あううああっ！ ひいっ……らめえ……っ」

（こんな……こんな小さい子に……犯されて……イカされちゃうッ！）

屈辱感と背徳感を粘膜に染み込ませるように、少年の肉棒が媚肉を責め立てる。そのたびにピーンピーンと弾かれる鎖から送り込まれる淫振動が、脳と子宮を同時に揺さぶり、

快楽が身体のあちこちで共鳴を起こした。うなじや腋の下、背中と脇腹の境界線、おへその周りや太腿の内側など、全身の性感帯が同時にくすぐり責めを受けているような異様な快感がブリジットを包み込む。

「ひっ！ ひいいいっ！」

切迫の吐息がヒユウツと喉に軋んだ。ブーツのつま先が立ち上がってベッドに突き刺さる。金の鎖を噛んだ真珠色の歯を輝かせて、おとがいがガクツと突き上げられた。

「きひいッ……いいッ……ひやッ……イひあああああッ！」

凄艶な色香を振りまいて美少女剣士が絶頂に達する。涎まで垂れ流す唇から激しい喜びの声を噴きこぼし、恍惚の痙攣が四肢と鎖をピーンと突っ張らせた。

勃起に絡みつく媚粘膜が収斂し、いまわの締めつけが少年を射精に導く。

「くっ……出るよッ」

胎内にドクンツと若い牡精が大量に撃ち込まれる。灼熱の逆りを受けて、もう一度ヒイッと啼いたあと、口から鎖が外れた。やがて糸が切れた操り人形のように全身の筋肉を弛緩させていった。

汗まみれの裸身をグッタリ横たえて大きく喘ぎながら、白銀の仮面の奥では切れ長の碧眼に悔し涙が光る。



子宮枷の呪縛から逃れて剣士として立ち直れたと思っていたのに、心身はより深く静かに侵蝕されていたのだ。もっと早く気づいていればとも思ったが、サガは一年も前からレジスタンス内に潜伏していたのだから見破るのは不可能だったろう。

「私をどうするつもりなの？」

かろうじて動く首を動かして、少年を睨んだ。あどけない笑みを浮かべているが相手は恐ろしい術師なのだ。

「そうだね。ちゃんとお人形さんになったら、とりあえずレジスタンスの連中を叩き潰してもらおうかな。もう飽きてきたし」

「な、なんですって……!？」

「ふふふ。その魔装獣も凌ぐ戦闘力を見せてやりなよ。冥土のみやげにさ」

共に闘ってきた仲間を自身の手で討たせようというのだ。あまりにも残酷な発想にブリジットは絶句した。

「もちろん、こういう暗示はそう簡単にはかからない。精神力を極限まで削り取らないとね。そのために時間をかけて枷を改造したんだよ。コズン！」

呼ばれてダガー使いが部屋に入ってくる。冷たい狐目で下着姿を見つめられて、羞恥と怒りで少女剣士の顔は赤くなる。

「あ、あなたも裏切り者だったの!? でもあなたは確か魔装獣に……」

「風牙には相手が密偵かどうかまで判断できないよ。まだ学習が不十分だったしね」

サガが代わって答えた。

「ふふふ。サガ様のお供は大変ですが、たまにはいいこともありますね」

薄く嗤って粘着質の視線を少女の身体に絡ませる。

「スライムは？」

「ここにありません」

手にしている大きめの鞆を揺すってみせる。少年のほうが地位が上なのだろう。丁寧な物腰で鞆から取り出したガラス容器をサガに渡す。容器の中では薄ピンク色の粘体がウネウネ蠢いていた。過去に何度かスライム責めを受けたことがあるブリジットは嫌悪感で鳥肌が立ってしまう。

「こいつは特別製なんだ。どういうふうに使うかは、まあ、お楽しみ」

サガが可笑しそうに笑っている間に、コズンがブリジットを背後から起こして膝立ちの格好にさせた。さらに頭の後ろで組んだ両手を手錠が拘束し、天井から鎖で吊るされる。

「な、なにをされてもあなたたちの言うことなんか聞かないんだからッ！ みんなに手を下すくらいなら……死んだほうがマシよ！」

正面から近づいてくるサガを睨みつけた。虚勢を張ったものの、すでに身体の内面を奪われるほど暗示は浸透しており、状況は極めて不利だった。

「いつまで強がっていられますかね」

背後から伸びたコズンの細い手が桃尻を撫で回した。

「はうっ！」

「初めて会ったときから、ずっとこうしてみたいと思っていましたよ」

「は、放しなさい！ くうっ！」

（身体さえ動けば、こんな奴……！）

屈辱に歯噛みしていると、近づいてきたサガの手が下着のフロント部分をグイと引っ張った。そしてそのポケット状になったパンティの中に、ガラス容器を傾ける。

「少し冷たいよ」

「そ、そんなところに……!? や、やめなさい！」

悲鳴を無視してドロリと垂れたスライムが下着の中に流れ込んだ。

「うあああっ!!」

冷たくぬめるような、あまりにも不気味な感触に聖域を覆われ、絶叫が迸った。スライムは下着の中に留まって、少女のぬくもりを楽しむようにムニムニと動き回る。そのうち敏感な肉芽を見つけるとそれを包み込むように密着し、淫靡な刺激を送り始めた。さらには一部は鎖に絡みながらクレヴァスに沿って伸びていき、膣内にまで侵入する。

「う、くううっ」

その妖しげな動きから、スライムがこれまで使われた拘束用ではないのは明らかだった。おそらく本格的に女体を責めるタイプなのだろう。染み込む粘液にも媚薬効果があるのか、早くも聖域全体がズキンズキンと疼き始める。

唇を噛みしめおぞましい感触を意識から切り離そうとするのだが、コズンが後ろから尻肉を揉み、青いネクタイの巻かれたうなじに舌を這わせて防壁を崩そうとする。

「あなたの活躍はずっと見ていましたが、たいしたものですよ。あの魔装獣を倒してしまおうんですから」

尖らせた舌先が耳穴に滑り込み、ゾワゾワくる不快感に仮面少女は顔をしかめた。

「そのあなたが、まじめな顔をして実はオマ○コに張り型を突っ込んだまま外を歩き回っていたり、夜になるとサガ様のペニスをおねだりしたり……くくく、面白かったですよ」

「だ、黙りなさいっ！」

羞恥で頬がカアツと熱くなった。自分の恥ずかしい姿を見られていたと思うと舌を噛み切りたくなるほど惨めだった。いくら暗示をかけられていたとはいえ、この男の言っていることは事実には違いないのだ。

「ところでサガ様。仮面はまだ剥がさないのでですか？　ずっと気になっていますが」
双臂を絞り出すように揉みながらコズンが聞いた。

「仮面には呪的防御が使われているんだ。まあ、呪力の源の精神力を今日、削り取ってし

まうから、そのときついでに剥がしてあげるよ」

「なるほど。では、お楽しみは取っておきますか」

嗤いながらパンティの上から柔らかな尻肉を執拗に撫で回した。

(くっ……でも……これくらいなら……なんとか)

覚醒して時間が経ってきたせいもあって、精神を集中させることができた。暗示にしても無警戒のときや、意識が朦朧としていたときにかけられるとマズイが、そうでなければなんとかなる。かつて奴隷に墮とされたときと違って、いまは子宮枷の呪力は弱まっている。勝算がないわけではないだろう。実際、いまま指先やつま先の感覚が戻りつつあった。(もう少し……もう少しで)

ブリジットが僅かな反攻の切っかけを見いだしたとき、男の片手が背後から侵入した。

「ひうっ！　そ、そこは……！」

「おや？　もしかして、こちらも開発済みなんですか？」

じっとり汗ばんだ肉の谷間を搔き分けるようにして、可憐に窄まったアヌスを探りあてられた。途端にジワッと臀丘に広がる妖美な熱。

(くっ……お尻は……)

バスクに徹底して調教されたアヌスは、ブリジットにとって弱点のひとつだ。触れられただけでも、鋭い快感が腰椎に走り息が止まりそうになる。それを見抜いたようにダガー

使いの細い指はジワジワと縫うように侵入してきた。

「ほうら、どんどん入っていきますよ」

「くああ……っ！」

尻タブを引き締めて抵抗するが、なんの役にも立たず、根元まで貫通されてしまう。

「お姉ちゃんはお尻も感じるんだね」

前からはサガの手がスライムで膨らんだ下着の底をゆっくり押し揉んできた。グチャグチャと軟体動物の粘液を肌に染み込ませるように円を描くようなマッサージを送り込む。

「う……うう」

腰を前後挟み撃ちで責められて、増幅する快感にブリジットは菌を食いしばった。股間をジワジワとトロ火で焙られるような疼きが襲ってくる。その疼きが下腹の底に伝わってきて、なだらかな腹筋や白い内股に玉の汗が浮き上がる。

「やっぱり感じてきたね」

悪戯っぽい光を浮かべた緑の瞳が覗き込んでくる。

「ば、馬鹿にしないでッ！ これくらいのことです」

「へえ。じゃあこれはどうかな」

「あっ」

身構える前に少年の唇が右の乳頭に吸いついてきた。

「ああああっ！」

目の前で星が散って、頭上で拘束された手がぎゅっと拳を握った。媚薬で敏感にされたニップルに弾ける快美感は肺腑を溶かすほど強烈だ。

(こんな……ううっ！)

チュウ…チュウ…チュウウウッ……！

断続的に赤ちゃんのように吸われると、胸が切なくなって子宮が疼きます。そして少年の唇に引つ張られて上体が傾くと、お尻を後ろに突き出す格好になってしまった。

そのチャンスを見逃すはずもなく、コズンは二本目の指を肛門にねじ込む。

「うっくうう！」

サガはほとんどアヌスには触ってこなかっただけに、数日ぶりの肛虐は衝撃的だった。回転され抜き差しされるたびに、目も眩むような快感が湧き起こる。そしてその快感が次第に『渴き』へと変わっていくのだ。

「くくく、お尻をヒクヒクさせて。そんなに気持ちいいですか、剣士様？」

指を喰い締めてくる粘膜の熱さと締めりのよさに、コズンが淫らな嗤いを浮かべる。その情感の昂ぶりのままに、指を三本に増やして抉り込んだ。完璧な調教を受けたアヌスは驚くほどスムーズに男の指を迎え入れてしまう。

「くあああッ！」

拡張されこね回される肛門粘膜から発生した、灼けつくような快楽電流が次から次背中を駆け上がった。その狂おしいまでの激感の中にある物足りなさ。その『渴き』の正体がなんなのか。

——もつと太いモノで——もつと奥まで——！

ドロドロに溶け始めた意識の中に、ふっと浮かんでくる『解答』を必死に無視した。

(まだまだ……みんなのためにも……まだ、負けるわけには……)

いままで孤独な闘いを続けてきたブリジットにとつて、スティアをはじめ、共に闘う青い獅子のメンバーはいまではかけがえのない仲間だった。その仲間を思う気持ちがかろうじて少女剣士の心を支えていた。

「ふふふ。こんなに柔らかくなってきましたよ」

出し入れさせていた三本指を三方向にグイッと広げると、驚くほどの柔軟性で括約筋が広がり、三角形の空洞がぼっかりと口を開ける。

「うう……っ」

「中まで丸見えですよ。剣士様のお尻の中は、なかなか綺麗なもんですね」

ピンク色に濡れる粘膜に目を細めながら言った。

「そ、そんなところまで……あうッ！」

もつとも恥ずかしい肛門の中を覗かれていると思うと、恥辱で気が狂いそうになる。し

かし身体はその恥ずかしさにも反応して、暴かれた肛門粘膜が妖しく蠢く。視姦された粘膜がジーンと痺れジクジク腸液を湧かせてしまう。

「ここに太いのが欲しいのでしょうか？」

再び三本指をズブズブと埋めてコズンが嗤った。

「くううっ！ 馬鹿にしないで……ッ！ こ、これくらい……な、なんとも……ないわッ！」
強気に言い張るものの額には脂汗が滲む。本当はいつ我を忘れて痴声を上げてしまうかわからないほど官能が煮えたぎっていた。

「なかなか頑張るね、お姉ちゃん」

乳首を甘噛みしながらサガが上目遣いで嗤った。

「でも身体は正直だよ、ほら」

少年の視線を追うと、押し揉まれていた下着のフロントが盛り上がっているのが見えた。それとともに、股間を包んでいる不気味な粘着感に混じって得体の知れない感覚が芽生え始めている。

（な……なに？ なにが起こっているの……）

スライムがなにか別の動きを始めている。ドクンドクンと脈打つような疼きと、熱さを感じる。突っ張るような、血液が凝縮していくような不思議な感じ。それに連動して鎖が胎内でざわめいている。

(だめ……こ、これ以上なにかされたら……)

このまま耐えていても追いつめられるだけだ。蹴りだけで闘えるものかわからないが、反攻を期して僅かに動く脚に力を込める。そのとき、急にサガの顔が目前に近づいてきた。

「気づかないとも思ったの？」

「な!？」

狼狽している隙に汗を浮かべた右の首筋に少年の唇が吸いつく。

チュウウウツツツツツ!

僅かな痛みとくすぐったさ、熱を伴う容赦ない吸引は、少女のか弱い白い肌に見事に赤いキスマークを浮かび上がらせた。

「イヤッ！」

「ふふふ」

出来映えに満足げに嗤いながら続けて反対側にも唇を押しあてる。

「や、やめて……っ! 跡をつけないで！」

「もう終わったよ」

そう言うときサガは再び吸乳を再開する。

青いネクタイを巻いた首の両側に赤い痣を刻まれて、仮面の少女はブルブル頭を振った。まるで少年の所有物にされたような屈辱だった。そればかりではない、両脚の動きが再び

封じられてしまっていた。さらに急に頭の芯が痺れてきて、視界が霞がかったようにぼやけてくる。

(うう、こ、これも……呪術なんだわ)

頸動脈に浸透した呪が血液に溶け込んで脳に送り込まれる。精神力が一気に低下してしまい、あさましいよがり声が喉奥から漏れるのを抑えきれなくなった。

「こ、こんな……ふあっ……うああんっっ！」

指に掻き回されるアヌスが快楽の泉と化して腸液を溢れさせ、クチュクチュとはしたないう水音を響かせた。少年に揉まれ、吸われまくる乳房から、母性を狂わせる妖しい快感が全身に広がって、心と身体がジワジワ蝕まれていく。それにシンクロするようにスライムと鎖に責められる秘園からも牝蜜が湧き出て下着をジっとり濡らしてしまう。激烈な色責めに全身を汗で光らせながら、スレンダーな裸身をクネクネ悶えさせる白百合の剣士。そして恐ろしいことに、あの得体の知れない感覚がますます膨れ上がってくる。

(なにが起きて……。ああ……。わ、私の身体……。どうなってしまったの)

いまや白いパンティの前部は、なにか硬い棒状のモノによって突き上げられ、その膨らみの頂点にもジワリと染みが広がり始めている。膨らみを少年の手で撫でさすられるたびに、ツーンツーンと身体の芯に染み入るような不思議な感覚が生まれた。

「感覚も繋がったようだね」

嬉しそうに嗤った少年の小さな手が、サイドから下着の中に侵入する。

「ひあああああつ!!」

そこにあるモノをぎゅうつとつかまれた瞬間、雷に打たれたようにブリジットの身体が仰け反った。神経そのものを鷲づかみにされたような異様で強烈な感覚。その感覚の源がゆっくりとパンティから引きずり出される。

「ほら、お姉ちゃん。見てご覧よ」

サガのおどけた口調とともに姿を現したモノを見て、仮面の下の青い瞳がこれ以上ないほど大きく見開かれた。

「な……なに……まさか……あああああああつ!!」

驚愕のあまり、思わず声が掠れた。上気していた顔がさつと青ざめる。

太く反り返った胴部。その上に三角形のエラを持つ尖った先端部が続く。おぞましいその形状は紛れもなく牡の生殖器官であった。

股間に取りついたスライムが形を変えたものなのだろう。薄桃色の透明ペニスはある普通の男性の平均を遙かに上回る長大さだった。太さは片手でつかんでも指が回らないほどあり、長さも勢いよく反った亀頭部がおへソに届くほどだ。しかもまだ大きくなる気配を見せてピクピク脈動している。表面はヌルヌルと不気味に濡れ光っているが、凝縮された粘体の棒はかなりの硬度を持っておりようだった。

そして一際目を引くのが、透けたペニスの中心を蠟燭の芯のように貫いている鎖だ。スライムは子宮枷にまわりつくようにしてペニスを形成したらしく、鈴口にあたる部分から粘液に濡れた鎖が垂れ下がり先端についたリングが揺れている。見た目だけでなく呪的にも融合しているのだろう。剥き出しにされたペニスにそよぐ僅かな空気の流れまでもが鎖を経由して子宮に響いた。

「こんな……こんなのいやッ！ 外してッ！ すぐに外しなさいッ！」

ブリジットは狂ったように頭を振りたくった。いままで凌辱での性体験しか持たないブリジットにとって、男根はおぞましい性の地獄の象徴でしかない。それがいま、我が身の一部となって股間に雄々しく起立しているのだ。羞恥以上に生理的な嫌悪感で、全身の毛穴が粟立ってしまう。

「お姉ちゃんのために古代魔法で作ってみたんだ。このオチンチンきつと気に入るよ。兄様には叱られるかもしれないけど……」

ギチィッ！

「きひいいいっ!？」

いきなりサガの手が思い切り疑似男根を握りしめた。そこに生じた感覚の凄まじさを物語るように、ブリジットの顔が天井を向くほど仰け反った。腰を振って逃げたいところが、アヌスを指で貫かれたままなのでそれはかなわない。

ズシュッ……ズシュッ……ズシュッ

「いやああッ！ やめ……くうううッ」

根元から先端に向かってしごきたてられ、形容しがたい刺激が魔根の中を荒れ狂った。ビリビリと走る高圧電流が鎖を伝って子宮に流れ込み、混ざりあう牡と牝の性感が少女剣士の心を溶かしにかかる。

ズシュッ……ズシュッ……ズシュッ

「気持ちいいでしょ。いままでお姉ちゃんの中に突っ込んできた男は、こんなふうに感じていたんだよ」

少年の手は休みなく一定のリズムでペニスをしごき続けた。男の快楽を仮面の剣士の身に教え込むように、じつくりと、執拗に往復を続ける。

(そんな……これが……これが男の人の……お、おちんちんの……感覚……?)

痺れに似た感覚が肉棒を貫いて、津波のように胎内に押し寄せる。このまま子宮が溶けてしまうのではないかと思うほど、その勢いは凄まじかった。ドロドロに溶けた悦虐のストープに子宮が煮崩れてしまいそうだ。その未知の感覚を処理しきれないのか、ひたすら肉体だけが上昇を続ける。

(ダメよッ！ こ……こんなので……感じたくないのにッ！)

やがて枷に責められ続ける子宮内に熱い感覚が生まれ、その感覚が奔流となって逆流し、

疑似男根へと向かっていく。

「うあっ！ な、なに……なにかが……出て……ああッ!!」

寄生されたペニスによって改変されてしまった絶頂へのプロセスが、ブリジットを戸惑わせている。いつ果てるのか、自分がどの程度追い込まれているのかすらわからない。

「くくく、溜まってきたよ。枷がお姉ちゃんから力を吸い取って、それをスライムが精液に変換するんだ。よくできているでしょ？」

神秘的な深緑の瞳がキラリと輝く。鎖に沿って子宮から流れ出た白濁液がスライムペニスの中にジワジワと溜まっていた。白濁液の量が増すにつれて、ペニス自体も体積を増しさらに膨れ上がった。

ギチギチ：ギチ：ギチィィッ!

「ひっぎいいいいいいッ!!!」

サガの手が握ったまま小指から薬指、中指、人差し指へと順番に力を込めていく。それを何度も繰り返され、根元から絞り上げられる疑似ペニスの先端に熱と疼きと白濁液が急激に溜まっていく。だが白濁液がそこから溢れることはなかった。代わりに透明の液だけが、トロトロ溢れて鎖を濡らしていく。

「くうっ……手を……ああっ……は、放しなさいッ」

ポニーテールを打ち振ってブリジットは抵抗する。

もう自分が我慢しているのかどうかもわからなくなっていた。耐え得る限界はとうの昔に超えている。むしろ最後の瞬間、男根による絶頂、すなわち射精というプロセスをまだ肉体が知らないお陰で踏み止まれているのかもしれない。

でも、もし……それを知ってしまったら……覚えさせられてしまったら……？

（だ、だめ……それだけは……イヤッ！）

そうなってしまうたら、自分も不潔な凌辱者たちと同じになってしまうし、まいそうな気がした。破滅の予感に、碎けんばかりに歯を噛みしめて崩れそうな自我を奮い立たせた。

「あれ、お姉ちゃん。まだイカないの？ それともイケないのかな」

悶える白百合の剣士のペニスを擦りたてながら、無邪気な顔に淫猥な笑みを浮かべる。

「仕方ないね。コズン、手伝ってあげて」

「はい。こっちも準備はよさそうですね」

散々アヌスを責め鬨っていた指が粘膜を引きずりながらぬるりと抜けた。解放感を伴う肛悦に薄膜を隔てた子宮を揺さぶられ、ブリジットはギクンと背筋を震わせる。

「そろそろいきますよ」

淫らな性拷問に耐える少女剣士を嘲笑うように、尻タブが大きく掻き広げられた。

「コズンはお尻好きだからね。お尻用にあそこも色々改造してみたいだよ」

恐怖に駆られて振り向くと、いままさに背後の男が肉棒を突き入れようと構えていた。

黒く反り返った毒蛇のような男根は大きさは標準的だが、胴の部分にいくつも節くれた瘤こぶがあった。まるで亀頭のカリが連続しているようなのだ。

(あ、あんなものでされたら……)

おぞましい改造男根を目のあたりにしてブリジットの顔が青ざめる。そのくせ期待めいたときめきで鼓動がトクントクンと胸を打つ。疑似ペニスがビクンッと反り返り、菊蕾がキュッと窄まってはフツと開いて男の目を楽しませる。

「なかなか縮まりはよさそうですね。楽しみですよ」

「いやあああつ！」

ジワッと粘膜を押し広げられて、とろける感触がうなじの産毛を逆立たせた。数日ぶりに犯されるアヌスは、ふっくら真綿のように柔らかく異形の男根を受け入れてしまう。鋭く尖った亀頭部が沈み込み、続けていくつもの節を持った幹が粘膜を削りながら埋まっていく。その一節ごとにブリジットのアヌスは敏感に反応してヒクヒク蠢いた。

「あつ、あつ……あぐううっ！」

「ほうら、全部入りましたよ」

最後の一突きで男の腰が少女剣士のお尻にドスンと密着する。腸管を灼熱の棒で深々と貫かれ、ショックで目の前が一瞬眩んだ。しかし肉体は久しぶりに味わう肛交の淫悦に歓喜し、ブルブルッと双臀を震わせる。

さらに両手を前に回し、サガに代わってブリジットのピンク色のペニスをグッとつかんだ。

「ひ……っ！」

「これは私が少年を犯すときに使う体位です。いきますよ」

そのまま取っ手代わりに弄び、美少女剣士に淫らな腰使いを強要する。

「くふっ……あああああ……」

腰がクネクネと前後に揺れ始め、急激に膨らむ快感で目の前の火花が散る。

「これは素晴らしいですね。柔軟性も締めつけも文句なしですよ」

嬉しそうに嗤いながら盛んに抜き差しを繰り返す。

「ふふ。お姉ちゃんもなんだか男の子になったみたいだね」

「う……ああ……」

アヌスを瘤が一節通過するたびに、どす黒い快感が膨れ上がり、腰骨がグズグズに崩れそうになる。魔悦に抵抗しようとするほど男根を締めつけてしまい、燃え上がる快楽に脳が灼けた。

「だいぶ仕込まれているようですが、私のモノもなかなかでしょう」

味を教え込むように何度もスライドを刻む。擦られる粘膜から真っ赤な炎が脳天めがけて燃え上がり、その炎が飛び火したのか疑似ペニスさらに硬く勃起してしまう。

「また硬くなってきましたね。剣士様はセンズリも気に入りましたか？」

苛烈なアナルセックスと同時に、もちろんペニスも男の手が休むことなく責めていた。クンクンッと手首のスナップを利かせてしごきながら、時折、折れよとばかりにギューウッと握り込む。もはやスライムペニスの中いっばいに溜まった白濁で、いまにもペニスが爆ぜてしまいうさだ。

「んあああああッ！ ……お尻が…オチンチンがあ……ひいっ……だめえッ！」

異常すぎる快感が官能の迷宮を彷徨っていた女体を強引に絶頂に向かって押し進め始める。内臓も筋肉も骨もすべてが焼け落ちて、ひとつの肉塊になってしまったような気がした。身体中の血液が沸騰して、真っ赤に灼けた脳は淫らな快感だけをひたすら感じ続ける。さらに暴発寸前のペニスの先端で揺れている金鎖をサガの手がつかみ、そのままズルズルと鎖を引き出していく。

「ひいっ！ や、やめてええっ！ 鎖に触らないでッ！」

耐え難い刺激が疑似ペニスを襲い、ブリジットは悲鳴を上げた。

「ふふふ」

少女の反応に満足したのか、サガは鎖を引き出しては再び呑み込ませるということを執拗に繰り返した。

「うあああああッ!!」

部屋中に満ちる絶叫。噴き出した大量の汗が白銀の仮面を濡らす。

それはベニスの内部、クリトリス、膣肉、子宮口を同時に呪鎖で責めるという、悪魔的な拷問だった。四つの急所から流れ込む雪崩なだれのような激感で、白百合の剣士の自我を包む壁がミシミシと音を立てて軋んだ。苦痛、快感、灼熱感、搔痒感がそれぞれ受容限度ギリギリで絶え間なく襲ってくる。普通の人間ならとっくに失神しているだろう。正気を保ち耐えていられること自体、奇跡と言えた。

だがサガの責めはそれだけではなかった。

「辛いのは最初だけだよ。一回射精しちゃえば後は天国だよ」

残酷に嗤って呪を唱える。瞬時に形成された呪界が辺りを包み、呪力が少年の手に収束していく。そしていきなり赤い電光が散った。

ビリビリビリビリビリッ！

「きゃあああああっ!!!」

魔法の電撃がベニスを貫き、子宮を直撃する！

想像を絶する拷問に、背筋が痙攣してプロンドのポニーテールが一瞬逆立つ。頭上で拘束された手が、手袋を破りそうなほど強く拳を握る。しかしベニスはますますいきり立ち、中に溜まっていた白濁液が沸騰するように沸き立って、出口を求めて荒れ狂った。

「これはいい。よく締まりますねえ」

失神する間もなくアヌスを突き上げられた。異形男根の瘤節がふつくら充血した肛門粘膜を押し込んで、引きずるようにして捲り返らせる。

ペニスも、ものすごい勢いで擦られた。十本の指すべてが急所を擦るように激しく上下する。一往復で二十個の快感の火花が瞬き、それがどんどん蓄積される。鎖の出し入れも激しさを増し、猛々しい勃起が少女の白い腹にビタンビタン叩きつけられ、透明な牡露を塗りたくった。

そしてそこをさらに情け容赦ない電撃が襲う。

「んあああああああッ！ ……ひぎいいいいいいッ!!」

(しぬ……ほんとうに……しんじやううう)

気を失うことも許されない生き地獄。溶けたチーズのようにグチャグチャになった意識の中で、なにかが変わり始めていた。ペニスの中を焼き尽くすような灼熱感が、甘い疼きへと変化する。破裂寸前の苦痛が、絶頂前の切迫感へと変わる。

凄まじい責めの果てに、ついに肉体はおぞましいペニスの感覚を『快感』と認識してしまっただ。

(いや……こんな……このままじゃ……し、射精させられちゃうう！　そ、そんなのいやあああッ！)

心で拒絶しても身体が一度認めてしまえば、もう止めようがなかった。腰が勝手に動き

出し、あさましくも男の手にもつとペニスを擦りつけようとする。ブーツの中で丸まったつま先がジーンと熱くなってきた。腰椎がピキピキと震える。こみ上げるなにかが亀頭部に集中した。

「とどめだよ、お姉ちゃん。思い切り射精していいからね」

邪悪な笑みを浮かべて鎖をジャラッと引き、これまでで最大の電撃を送り込んだ。

バチバチバチバチバチ

「ぐきやあああああああッ!!!」

可憐な少女の口から発せられたとは思えない、ケダモノじみた咆哮が噴き上がり、ペニスも白百合の剣士自身の身体もピン硬直した。頭の中が真っ白になり、意識が粉々に吹き飛ばす。煮えたぎる粘液が身も心も溶かしながら魔根の中を駆け上がった。

「ふあうっ!!」

まなじりが裂けるほど瞳が見開かれた。ほぼ同時に鎖を吞まされていた鈴口がグツと口を開く。次の瞬間！

「ふひいっ！ きゃあああああああああああッ!!!」

ドビュウウウウッ！ ドブドブドブッ！ ビュルウウウウッ！

おびただ夥しい量の黄ばんだ牡液がペニスから噴き出す。高圧で発射された精液はベッドはもちろん壁や床、部屋のあらゆるところに飛び散った。高粘度の液体を噴射する肉棒は、その

反動でビクンビクンと大きく上下に揺れる。

「くあああああああ……ひっ！ ひあああああああああ……！」

膝立ちの身体が反り返って、天井を向いたペニスからとめどなく精液が溢れ出す。降り注ぐ濃厚な精液シャワーは美少女剣士の身体を覆い尽くさんばかりだ。

汚辱の体液が噴き出すたびにペニスが脈動し、さらなる白濁液を吐き出す。散々鎖に責められ電撃に痛めつけられた輸精管が通過していく白濁に痺れ、それがまた快感を呼んだ。「あひいいいっ！ と……とまらな……ひいいいっ！」

男ならもうとづくに果てていると思われる量を超えて、ブリジットは射精し続ける。大量の特濃精液の源泉は、子宮という女の命の中心なのだ。そこから枷によって吸われる命の力、心のエナジーとも言えるものがおぞましい牡精液へと変換され吐き出されていく。

やがてベッドシートに一抱えほどもある精液溜まりを作って、ようやく射精が終わった。焦点を失った瞳、涎すら垂らした唇。白濁をたっぷり被った白銀の仮面の下には肉の悦びと痛苦を超越した至福の表情すら浮かんでいた。

少女のモノとは思えない濃厚な牡臭が部屋いっぱいに広がり、空気もより熱く湿った感じに変化していく。

「ふああ……はあっ……はあっ」

荒い呼吸で胸が盛んに上下を繰り返していた。



この世のものとは思えない快楽と引き換えに、魂を抜き取られたような虚脱感と、あまりにも常軌を逸した快楽を受け入れてしまった背徳感と転落感がじわじわ胸を暗く染めていく。だが魔根は多少弛みはしたものの、いまだ衰えることなく股間に起立している。それはこの地獄の責め苦が継続することを告げていた。

「とうとう射精したね。おめでとう、お姉ちゃん。気持ちよかったでしょ」

嗤いながらサガが顔を近づけてくる。うつすら目を開けたブリジットは、氣力を振り絞って睨み返す。

「へえ、まだ頑張ってくれるんだ。ボクも嬉しいよ」

そして脱力している仮面の少女の顔に付着している白濁をペロペロと舐め取っていく。

「うう……………サガ……………」

「まだまだこれからだよ。お姉ちゃんがお人形になるためには、もっともっと射精しないとね」

眼前でニコリ笑う少年の言葉に、気が遠くなる思いだった。未知なる牡の絶頂感を体験させられ、体力も氣力もごっそり削り取られた氣がした。これ以上責められたらどうなってしまうのか予想もつかなかった。

そのあとも、強制射精責めは続いた。男の手で荒々しくしごかれたり、鎖を出し入れされたり、足で踏みつけられたりもした。そうかと思えば少年の唇で優しくフェラチオされ、

そのたびに何度も何度も射精させられてしまった。射精した回数はずでに二十回を超えているだろう。イクたびに、感度が高まり射精までの時間も短くなっていく気がした。さらに身体との一体感も強まって、どうすればより気持ちよく射精できるのか身体に覚え込まれつつあった。できるだけ腰を突き出し、男たちの好奇の視線を浴びつつ男根を脈動させ白濁液を高々と噴き上げる。そんな破廉恥極まりない射精の仕方を、正義の剣士は無意識のうちにするようになっていた。

それでも心まで屈したわけではなかった。生命力を吸い尽くされ半ば朦朧としながらも、瞳は輝きを失わない。その精神の清冽さにサガも驚いた様子だったが、余裕の態度は崩さない。むしろ少女剣士の抵抗を樂しむように責めをエスカレートさせる。

「うあ……うあああつ」

肛門を貫かれたままコズンの身体の上に仰向けにされたブリジットの身体に、サガが覆い被さるようになって膣肉を犯している。奴隷に墮とされたあの日、激しい輪姦の果てにトドメを刺されたときと同じ二本差しだった。

あのと看以来、前後の穴を同時に責められると理性が働かなくなってしまう。別人のように乱れて、正義の剣士とは思えないほど惨めな痴態を晒してしまうのだ。さらにいまは、サガの身体に疑似ペニスを挟まれて責められてもいた。連続射精で敏感になっている身体では、耐えられるはずがなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>